



第 21 回日本看護管理学会学術集会開催

8月19日、20日の両日、パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）において、第21回日本看護管理学会学術集会が開催され、4775人が参加しました。今回のテーマは「2017年看護管理の『シンカ』」

上泉和子理事長の開会挨拶につづき、小池智子学術集会長が「看護管理・政策の『シンカ』」と題して講演を行いました。今回のテーマにある「シンカ」は、「真価」「深化」「進化」「新価」を表しており、講演のタイトルに看護管理だけでなく「政策」を加えたのは、日本看護管理学会の前身の名称が「日本看護政策研究会」であり、発足当初から現在に至るまで、看護の現場を変えていくには看護政策が必要という認識に立っているからだとして小池智子学術集会長は述べ、少子高齢化の急激な進展・厳しい財政状況のなかで、看護職に求められる役割について話されました。続く2つの「教育講演」では、国際保健の状況から見る日本の医療・保健・看護の近未来（渋谷健司東大教授）、情報テクノロジーから見る日本の医療介護分野の未来（西山俊樹東京都市大学准教授）が指し示されました。また、パシフィコ横浜の各会議室では様々なセッションが行われました。

2日目の午後には、前ICN会長のジュディス・シャミアン博士が「看護指導者が挑戦すべき課題：保健医療に関する公共およびグローバル政策において Shinka（進化）すること」と題する特別講演を行いました。このなかで、シャミアン博士は、世界の保健医療のなかで看護職の果たす役割はきわめて大きく、その役割を果たすためにも政策にコミットし、様々な分野のキーパーソンとネットワークを築くことが重要だと力説しました。

シャミアン博士の講演を受けて、福井小紀子大阪大学教授、石田まさひろ参議院議員、伊達仁人イーグルマトリックスコンサルティング株式会社 CEO が、それぞれの立場から、政策形成に関わる看護研究（福井）、看護の現場、

そして将来像からどのような政策をつくっていくか（石田）、医療状況の変化から将来の看護はどのような役割を担うのか（伊達）について語られました。その後、シャミアン博士を交え、ディスカッションが行われました。



第 39 回日本 POS 医療学会大会開催

第 39 回日本 POS 医療学会大会が 8 月 19、20 日の 2 日間にわたり、大正製薬本社ビル上原記念ホール（東京都豊島区）で開かれました。あべ俊子衆議院議員の特別講演や、さまざまなシンポジウムが行われ、参加した会員が POS の現状や課題について理解を深めました。

今大会は「地域包括ケアの時代における診療記載のあり方～今こそ POS の精神を、あらためて～」をテーマに開かれ、聖路加国際大学教育センター研修管理委員会の渡邊直委員長が大会長を務めました。また、会場には、同学会の会場で 7 月に亡くなった日野原重明さんの追悼コーナーが設けられました。

あべ議員は「看護記録の標準化について」と題した特別講演で、看護師が記録に費やす時間は労働時間の約 2 割を占めていること、記録の量が増えた結果、必要な情報が分散・重複し「患者中心・共同での記録」という POS の本質から逸れていることなど、看護記録を巡る課題を指摘。「一患者一カルテは基本であり、看護計画ではなく“患者計画”にしなければならない。患者のために、チームとして本当に必要な記録は何かを精査することが、医療の質の向上に繋がる。日野原先生がおっしゃっていた POS の本質に立ち戻り、皆さんが先生の夢を引き継いでほしい」と述べました。

シンポジウム「看護におけるケア記載 POS をどう活かすか」では、4 人のシンポジストが発表を行いました。このうち、南三陸病院前看護部長の星愛子さんは、20 年にわたって病院内で続けている研修会や事例検討会について紹介。「東日本大震災の翌年も、研修会は例年通り実施した。継続は力であり、20 年の歩みが今を支えている。POS 導入によって、患者さんの意思やその人らしさを活かした援助ができるようになった。これからも POS を基本とした患者に寄り添う看護を続けていきたい」と語りました。